

学部別インタビューによる学習者ナラティブとオリエンテーション実践 —大学入学時における外国語学習動機づけ促進の試み—

吉田 安曇・寺西 雅子（岡山大学教育推進機構）

Learner Narratives Based on Faculty-Specific Interviews and Orientation Practices:
An Attempt to Enhance Foreign Language Learning Motivation at University Entrance

Azumi YOSHIDA, Masako TERANISHI

(Institute for Promotion of Education and Campus Life, Okayama University)

要旨

岡山大学では新学習指導要領実施に合わせ、「学習者中心の学び」の実現を目指すTarget2025と呼ばれる方針のもと英語カリキュラムの改革を進めてきた。この改革では、英語系教員と各部局とが密に連携しながら、学士課程全体を通じた英語学習を全学的に展開していくことに焦点を当てている。その取り組みの一環として、各部局から推薦を受けたロールモデルとの学部別インタビューを実施し、英語学習についての詳細を聴き取った。また、新入生への激励のメッセージ動画を作成し、英語授業オリエンテーションで上映した。本稿では、インタビューで得られたナラティブやオリエンテーション実施の経緯、また、オリエンテーション後に実施したアンケート結果について報告する。

Abstract

Okayama University has implemented a comprehensive reform of its English curriculum as part of Target2025, a university-wide initiative launched in response to the new Course of Study issued by MEXT. The reform fosters close collaboration between the English section and other faculties to support undergraduate English learning across the university. We interviewed role models—successful English learners recommended by their faculties—about how they learned English. We also shared messages of encouragement for new students, which were recorded and shown during the orientation for English courses. This paper reviews the interview and orientation process, as well as first-year students' responses to a subsequent survey.

キーワード：学部別インタビュー，学習者ナラティブ，ロールモデル，オリエンテーション，動機づけ

1. はじめに

岡山大学では、新学習指導要領実施に合わせ、Target2025 と呼ばれる方針のもと英語

カリキュラムの改革を進めてきた。この改革では、学士課程全体を通じての英語学習継続の重要性を特に強調している。また、英語系教員と各部局とが密に連携しながら、全学で学生の英語学習を推進していくことも大きな柱となっている。本稿では、各部局から推薦を受けたロールモデル（英語学習成功者）とのインタビューや新入生向け英語授業オリエンテーションについて報告する。本実践は、単に英語学習の動機づけを行うだけでなく、英語学習の具体的な方法をロールモデルのナラティブを通じて提示することで、新入生が入学直後から自身の専門性と英語学習の関連性を認識し、主体的な学習計画を立てることを促し、複合的な効果を検証することを目的とする。

まず、第2章では、Target2025 の概要や各部局との連携について説明する。第3章では、インタビュー実施の流れについて述べる。特に、各部局から推薦されたインタビュー協力者の基本情報やインタビューの内容等について紹介する。次に、第4章で、英語授業の初日におこなったオリエンテーションについて、また、実施後のアンケート結果による新入生の反応等について述べる。最終章では、今後の課題も含め、本実践報告をまとめる。

2. 本実践の背景

2.1 Target2025 の概要

最初に、本学における Target2025 の概要について述べておきたい。2025 年度は、高等学校の新学習指導要領「主体的・対話的で深い学び」のもとで学習してきた高校生が初めて大学に入学するタイミングとなる（文部科学省、2017）。これを受け、本学では教育内容を大きく改訂した。この改定で目指すのは、「教えるから学ぶへ」そして「学び方を学ぶ」という学習者中心の教育である（岡山大学教学企画室、2024）。これにともない、学内での英語授業の位置付けが変更された。令和6年度までは、「教養教育科目」の下に「言語科目」が置かれ、さらにその下に「初修外国語」や「日本語」と並んで「英語」が置かれていたが、令和7年度からは、「学士課程教育プログラム」の下に「全学共通科目」や「専門教育科目」と並んで「英語科目」が置かれることとなった（岡山大学教育推進機構外国語教育部門、2025）。また、大学卒業後における英語学習の継続を促進するため、自律学習習慣の形成を目指す。特に1年次において授業外学習に重きを置いている。

2.2 英語教育系と各部局との連携

Target2025 の準備のため、令和5年12月に教育改革実施準備委員会が発足し、その下に英語科目ワーキンググループ（WG）が設置された。このWGは、教育推進機構外国語教育部門部門長、英語系WGメンバー数名及び各学部を代表する教員から構成された。さらに、このWGには「低年次英語科目班」と「高年次英語科目班」が置かれ、

低年次班と高年次班が互いに連携を取りながら、それぞれの任務を遂行していった。また、各部局の特色や強み、養成すべき人材像を踏まえながら、学士課程を通じた英語教育体制及び英語カリキュラムの作成を目指した。特に、1・2年次の必修科目と3～6年次の専門科目における英語教育との接続を重視し、英語科目と専門科目における英語学習の連動、英語系と各部局との連携強化を図った。さらに、この目標達成のため、英語系教員と各部局とが情報を共有する仕組み（英語教育連携プラットフォーム）を構築し、緊密な情報共有を目指した。具体的な活動として、高年次英語科目班では、英語系教員が数名ずつ各学部を訪問し英語教育について話し合う個別ミーティングを実施し、さらなる連携を深めていった。また、英語系と各部局が協力し「英語学習ツリー」を作成した。これは、各部局の専門領域における英語学習の特長や目的、学生がどの学年でどのような英語授業を履修するか等について、1枚のスライドにまとめたものである。これにより、学士課程を通じての英語学習が、より体系的かつ視覚的に捉えることが可能になった（図1参照）。

図1. 英語学習ツリー（教育学部）



また、1・2年次での学習内容を高年次へと積み上げていくには、2年次での学習内

容が重要となってくることから、2年生必修科目のテキスト回覧も行った。この回覧の目的は、それぞれのテキスト内容を吟味するというよりも、英語系教員が2年次必修科目においてどのような授業を行っているのかを各部局の教員に知ってもらうというものである。このような活動を通して、1・2年次で英語学習をやめてしまうのではなく、高年次、さらには大学卒業後も自ら英語学習を継続していける人材を育成する体制の強化を目指した。大学が直接関わることのできる期間は4年間（または6年間）に限られるが、その間に、生涯にわたって学び続ける力や姿勢を育むことが、英語教育の重要な使命であると考えられる。

3. インタビュー実施の経緯

前述の英語系と各部局との個別ミーティングの中で、ロールモデルとなりうる「英語学習成功者」の例として学生の推薦を依頼した。これは、2025年度の初回英語授業時に行う新入生オリエンテーションの中で、岡山大学の先輩の実例として紹介することが目的である。また、新1年生が自身を投影しやすい同じ岡山大学の先輩の学習体験を知ることによって、英語学習への意欲向上も期待できる。個別ミーティング後、各部局からは合計23名の在学学生・卒業生の推薦があった。このうち、インタビューの協力を賛同してくれた14名とZoomにてインタビューを行った。これらのインタビュー協力者の選定は、あくまで部局からの推薦に基づいており、全学部の学生数を反映した均等なサンプリングは行っていない。そのため、学部間の人数に大きなばらつきがあることをあらかじめ断っておきたい。

3.1 インタビュー項目

インタビューの実施時期は、2025年2月で、それぞれ30分から1時間程度のインタビューとなった。限られた時間内でのスムーズな実施を目指し、半構造化インタビュー（香取・角、2018 参照）を採用した。また、インタビュー実施に先立ち、協力者には承諾書の提出と事前アンケートの回答を依頼した。事前アンケートの質問項目は以下の通りである。

1. 入学年、お名前、学部・学科をお書きください。
2. 現在の職業や専門分野について簡単にお書きください。
3. 大学時代の英語学習において、特に印象に残っている経験を教えてください。
4. 英語学習を通じて達成したことや役立ったことについて教えてください。
5. 英語学習で挑戦したがうまくいかなかったことがあれば教えてください。
6. 新入生へのメッセージとして伝えたいことがあれば教えてください。

3.2 インタビュー内容

協力者の基本情報とインタビューの内容については表 1 にまとめる。協力者からは本稿への掲載について事前に告知し、了承を得ているが、承諾の得られなかった 1 名を除いた 13 名分のインタビュー内容について以下に記述する。

インタビューは協力者の承諾のもと録画し、キーセンテンスを抽出した。その中から英語学習の動機づけや現在のキャリアでの状況や背景等、重要度の高い要素に着目した。さらに、「将来の目標」「大学での英語学習方法」「入学後の変化」等のカテゴリに分類したのち、ロールモデルが新生に伝えたいメッセージを明確にするために要約を行った。表 1 はインタビューの全文ではなく、各協力者が持つ英語学習・キャリアに関する特徴的な要素を簡潔にまとめたものであり、協力者によって各カテゴリの分量や重点が異なることを付記する。

表 1. 協力者の基本情報とインタビュー内容

協力者	所属 (インタビュー当時)	インタビュー内容
1	文学部人文学科 1 年生	2 年生から歴史学（フランス）を専攻する予定。現在フランス語も勉強中で（仏語検定 3 級）、将来はトリリンガルの外交官を目指している。入学当初よりも格段に自信を持って、英語のプレゼンテーションができるようになった。高校までとは大きく異なり、大学の英語学習は自分の意見を述べる機会が多くなる。最初はそのギャップに戸惑うかもしれないが、「受験のための英語」から「使える英語」に発展させてほしいと思う
2	社会文化科学研究科 博士後期課程修了	オーストラリア在住。母語は中国語だが、日本語と英語も話せるトリリンガルである。中国での英語教育も受験のためのインプットが中心であったため、スピーキング・ライティング等のアウトプットが苦手だった。しかし、好きなドラマを見て気に入ったシーンのセリフを何十回も繰り返し覚えることで、生きた英語が身に付いた。
3	教育学部中学校教育 コース英語教育 3 年生	中学校の英語教師を目指している。G コース授業では、他学部生と白熱した議論を交え刺激的だった。また、模擬国連世界大会に岡山大学の代表メ

		ンバーの1人として出場したことが一番思い出に残っている。他にも、EPOK 交換留学、交換留学生の支援ボランティアなど、英語を使い外国人と交流できる場を積極的に持つようにしている。夢の実現のためには、長期目標を立てるだけでは漠然としすぎることもある。1ヵ月～半年単位の短期・中期目標をこまめに設定し、常に To do リストに書き出して、少しずつ確実に達成していくようにしている。
4	経済学部経済学科卒業 Capgemini コンサルタント	ドイツ在住。過去にも学内あるいは外部メディアの大学案内記事や動画等に取り上げられている。2011年入学であるが、当時まだ開設されて間もなかった L-café で、留学生と交流したことをよく覚えている。また、交換留学（EPOK）でアメリカでの語学留学も経験した。語学学習は大学卒業後、社会人になっても続く。世界の舞台でグローバルに活躍したい、海外の人々とつながりたいと思うなら、英語を学ぶことで格段に世界が広がると思う。
5	経済学部経済学科卒業 三菱UFJ信託銀行 勤務	英語学習を継続することで、TOEIC880点を獲得することができた。また、卒論で英語の文献を扱う際にもあまり苦労はしなかった。現在、銀行の営業職をしているが、就活でも TOEIC の得点がアピールポイントになった。また、業務に関する情報収集において、日本語のみだと内容が限られてくるが、英語が使えることで幅広い情報にアクセスでき、非常に役立っている。新入生の皆さんも英語学習を深めて、自身のキャリアの選択肢を増やしてほしい。
6	理学部化学科卒業 テキサス大学 ダラス校 博士後期課程2年生	アメリカ在住。現在、テキサス大学ダラス校博士後期課程在籍。岡山大学時代には、L-café に顔を出したり、土日を割いて IELTS の集中講義に参加したり、忙しい中、学習時間を確保することに努めた。「裏技」「すぐスコアが伸びる」といった

		英語学習の「近道」を探そうとしてしまった時もあったが、結局うまくいかなかった。自分なりの勉強法をコツコツ継続することが、一番確実な道。自身は、1年生の時に外国の大学院進学を考え、2年生の初めにキャリアセンターで相談をして自分のやりたいことを明確にしていた。やるべきことが明確になると、人はそれに向かって頑張ることができると思う。
7	理学部物理学科 自然科学研究科修了 アジレント・テクノロジー・インターナショナル勤務	現在、ソフトウェア研究開発をしている。社内のオフィシャルな文書はすべて英語。英語を目にすることへの経験的・心理的な慣れが、業務効率を大きく左右すると思う。また、学生時代に英語を避けることは、結果的に「自分の将来のキャリアにおいて機会を失う」ことに繋がると感じる。
8	農学部総合農業科学科 環境生命自然科学 研究科修了	フランス在住。フランス人の夫とは、岡山大学大学院で知り合った。昔から健康分野に興味があり、外資系製薬会社の病理学関係の仕事をしている。岡山大学在学中は、交換留学（米カリフォルニア州立大）、海外ラボ（中国吉林大）、留学生との交流（L-café、Resident Assistant）などを通じて、国際的な視野を身に付けることができた。英語を武器にすることで、将来の選択肢が確実に広がると思う。出身高校は超進学校で、独特な狭い価値観の中、窮屈に感じることもあったが、大学入学後世界に目を向けてみて自身の価値観が大きく変化した。例えば、様々な背景を持つ外国人との出会いが自分を大切にすることの重要性を教えてくれた。
9	GDP 4年生	4月から防衛省で勤務予定。元々外交官志望だったが、インターンなどを通じて防衛省での交渉役・調整役的業務内容を知り、自分に合っていると感じた。大学1年生の時にイギリスへの交換留学を経験したが、日本を外から見るいい経験になった。また、模擬国連に参加したことも印象に残

		<p>っている。英語で政策を提言する等、外交官になりきって諸外国と交渉することの楽しさを学んだ。岡大には1年生の時から英語を使える機会がたくさんあるので、是非自らチャンスをつかみに行ってほしい。</p>
10	<p>GDP 卒業 ソウル大学国際 大学院国際地域学科 修士課程1年生</p>	<p>韓国在住。岡山大学入学後、留学生との交流や国際学生シェアハウス、留学生チューターなどを通して、生きた英語を学ぶことができた。また、EPOK の交換留学をしたいという目標があったため、IELTS の学習も計画的に継続してきた。資格は学習成果の指標にもなるので、積極的に取得した方が良いと思う。韓国に来て、「日本人は英語力が低い」というイメージを持たれていることに非常に悔しい思いをしている。修士を終えたら、ユネスコ等の国際機関で働きたい。また、もう1ヵ国語（おそらくフランス語）を勉強したいとも思っている。</p>
11	<p>工学部機械システム系 自然科学研究科修了 ブラザー工業株式会社 勤務</p>	<p>日々、英語の4技能を駆使して産業用プリンターの開発に携わっている。岡山大学時代には、中国への短期国際交流プログラムに参加したり、国際学会で自身の研究テーマについて英語で発表・質疑応答を行ったりした。英語には長らく苦手意識があったが、自己学習や英語でのプレゼン発表を通じて、苦手意識が少し薄れ積極的に関われるようになった。また、入学時350点だったTOEICを1年半かけて680点にまで伸ばしたことも自信に繋がった。日本の教育制度上、今までは受動的な学習が中心で、英語を「話す」機会があまり多くなかったかもしれないが、より自由に学習できる環境にある大学生活の中で、是非英語を「話す」機会を積極的に作ってみてほしい。</p>
12	<p>工学部工学科化学・ 生命系4年生</p>	<p>4月から東京大学大学院へ進学する。大学1年生の時から、大学院進学のためTOEICの学習など続けてきて、745点を取得した。また、オースト</p>

		<p>ラリアで1か月間の語学研修に参加したことも印象に残っている。最初は親の勧めもありなんとなく参加したのだが、その後の英語学習の進め方に良い影響を与えたと思う。英語学習は、時間が確保できる大学生のうちに頑張っておいた方がいいと思う。</p>
13	<p>工学部工学科環境・社会基盤系4年生</p>	<p>毎日 Duolingo というアプリを使用して英語学習をしており、現在 637 日連続学習記録が続いている。しかし、TOEIC の勉強に関しては、1 か月前ほどから開始したため、思うように結果が伸びなかった。やはり少なくとも半年程度を視野に入れ計画的に学習を進めなければならないと後悔している。学生の皆さんにとって座学も大事だが、ぜひ外国人の友人を作って実際のコミュニケーションを楽しんでもらいたい。私自身はリスニングが苦手だったが、毎日アプリをやったり、留学生の友人と話したりすることで少しずつ意思疎通できるようになってきている。また、この3月には、スリランカへボランティア活動に行く予定。スリランカには以前にも行ったことがあるし、体力と健康には自信があるので、とても楽しみにしている。</p>

これらのインタビューから得られたナラティブには、共通する特徴が見られる。例えば、彼らの多くが大学入学後比較的早い時点で、将来の夢や中・長期の目標をしっかりと設定し、その達成に向けて着実に努力を重ねていったことが分かる。また、自分に合った学習法を見出し、学士課程を通じて継続的に英語学習に取り組んでいたこともうかがえる。さらには、EPOK 交換留学プログラムや L-café 等の活動を積極的に利用し、授業外でも英語に触れる機会を効果的に持つことができている。中学・高校時代には必ずしも英語が得意ではなかった学生も、大学在学中にその必要性を痛感することで、意識の転換、あるいは英語学習の動機づけへと繋がったようである。

4. 英語授業オリエンテーション

4.1 オリエンテーションの内容について

2025年4月10日と14日の両日に、GDPを除く全ての学部で英語授業オリエンテー

ションを実施した。これは、大学入学後、英語学習から距離を置いてしまう学生が少ない中、低年次での必修科目のみならず、高年次においても英語学習を継続することの重要性を広く周知し、学習への動機づけを高めることが主な目的である。オリエンテーションは、英語系常勤教員と非常勤講師が複数名チームとなり実施した。参加する学生は最も少ないクラスで 24 名、最大で 160 名であった。オリエンテーションの流れは以下の通りである。

- ① 今までの英語学習の振り返りと今後の学習目標
- ② 学部ごとの英語学習の特徴について
 - a) 4 年間の英語学習の見通し（各学部の英語学習ツリー紹介）
 - b) 先輩の声
- ③ 1 年次必修英語の特徴
 - a) 自律学習（EnglishCentral）
 - b) 多読
- ④ 来週からの授業のクラス編成について

まず、①では、今までの英語学習履歴について振り返り、得意な分野・苦手な分野等についてペアでディスカッションをさせた。一般的に大学生の英語学習の動機としては、1. 外国人の友人を作りコミュニケーションを取りたい、2. 外国の文化をよりよく知り楽しみたい、3. 情報収集のため、4. 研究で必要、5. 就職のため、6. 脳の活性化のため、7. 世界を知りたい、等が挙げられるが、これらを踏まえつつ、今後の英語学習継続の重要性についてクイズ形式で再確認させた。次に、②では各学部のカリキュラムツリーについて説明をした。また、英語学習成功例として先輩の声を紹介し、激励メッセージも上映した。③では、授業外学習を少なくとも 30%は成績評価に加味することを説明するとともに、自律学習習慣形成の重要性を強調した。④では、今後の英語授業編成を紹介した。最後に、授業への積極的な取り組みを促し、オリエンテーションを締めくくった。オリエンテーション全体を通して、ペアあるいはグループワークに取り組むことで、新入生同士打ち解けたり、ネットワークを作る良いきっかけにもなった。

4.2 オリエンテーション後アンケート

オリエンテーション後のアンケートでは、全学部の新入生 1719 名から回答が得られた（回答した学生の所属学部の内訳は、表 2 を参照のこと）。本学は学部ごとの所属人数に大きな違いがあるが、第 3 章でも述べた通り、全学部の学生数を反映した均等なサンプリング等を行っていない。これは、本実践の目的が、専門分野におけるキャリアと英語学習の接続性という「質的な示唆」を新入生に提示することにあつたためである。

アンケートはグーグルフォームにて集計し、記名式とした。学生への問いは、『岡山大学における英語学習の4年間または6年間を通じての目標や、今後の学習についてのビジョンを書いてください』と『本日の英語オリエンテーションに参加した感想を自由に書いてください』の2つである。

表 2. アンケート回答者の所属学部

学 部	人 数
文学部	126
教育学部	226
法学部	103
経済学部	147
理学部	71
医学部医学科	99
医学部保健学科	157
歯学部	24
薬学部	83
工学部（機械システム系）	115
工学部（環境・社会基盤系）	87
工学部（情報・電気・数理データサイエンス系）	182
工学部（化学・生命系）	127
工学部（情報工学先進コース）	42
農学部	130

4.3 アンケート結果の分析

本学の学生の英語学習に対するビジョン及びオリエンテーションに対する反応をより深く理解するために、アンケート中の2つの問いに対する自由記述内容を、横江・山内（2023）を参考に分析した。なお、分析はKHコーダーを用いたテキストマイニング法を採用した。これにより、頻出語彙を抽出したり、共起ネットワークを作成することで共通するコンセプトの把握が可能になる（末吉、2019）。共起ネットワーク図とは、語の出現頻度（円の大きさ）や共起の強さ（線の太さ）を視覚的に示すことで、テキスト中、同時に出現する語同士の関係を可視化したものである。

まず、『岡山大学における英語学習の4年間または6年間を通じての目標や、今後の学習についてのビジョンを書いてください』という問いでは、昨今のグローバル事情を反映して、「海外」「会話」志向が大きかった。全ての学部・コースにおいてこれらのキ

ーワードが出現するが、特に、文学部、教育学部、工学部・情報工学先進コースでその傾向が強かった。また同じく、文系理系を問わず多く見られたのが「TOEIC」志向である。理系では8学部・コースにおいて、また割合としてはさほど高くないものの、文系の全学部においても「TOEIC」というキーワードが出現している。この結果は、大学入学直後の新生が、将来のキャリアにおける英語の重要性、特に TOEIC スコアの役割について、すでに高い関心を持っていることを示唆している。この背景には、社会における TOEIC の認知度の高さや、就職活動での活用事例に関する情報が、入学以前から新生に浸透していることが影響していると考えられる。しかし、医学部医学科、医学部保健学科、歯学部のいわゆる医療系学部では、「TOEIC」というキーワードが現れなかった。これは、国家資格の取得がキャリアの前提となる医療系学部では、企業への就職活動で有利になる TOEIC よりも、臨床や研究での実務に直結する英語能力や、国際的な情報収集能力の方が優先されていることを示唆していると考えられる。

一方で、理系と文系でのビジョンの違いが明確になった部分もある。特に顕著に表れたのは、「論文」志向である。実際に記述した割合に違いはあるが、理系では11学部・コース全てにおいて「論文」というキーワードが出現するのに対し、文系では文学部と教育学部のみであった。一般的に理系分野の方が、研究・キャリアにおいて英語論文への接触が多いことを学生が認識している結果と言えよう。なお、KH コーダーを用いた共起ネットワークの一例として、工学部・情報工学先進コースの例を図2に示す。

自分の将来のためにも英語の勉強を続けていこうと思いました。(工学部環境・社会基盤系)

- ・先輩方がすごく努力していることがわかった。(工学部情報・電気・数理データサイエンス系)
- ・先輩のインタビューがあり、とても励みになった。(工学部化学・生命系)
- ・英語に苦手意識を持っていたので大学で英語を学ぶことに不安を感じていたけど、過去の先輩の話聞いて TOEIC を頑張ろうと思った。(工学部化学・生命系)
- ・様々な英語学習の機会を知れてよかった。利用してみようと思う。英語は得意ではないけど、先輩方の意見をきいて、これから頑張ろうという気持ちになった。(法学部)

以上のように、オリエンテーションでの先輩の経験談は、新入生にとって最も身近なロールモデルとして大きな意味を持つものと言える。つまり、自身の専門分野における長期的なキャリアと英語学習の必要性を明確に意識する励みとなったと考えられる。また、入学時における動機づけの向上という目的に照らし合わせても、一定の効果を上げたと言えよう。今後は、本オリエンテーションに参加した学生の追跡調査なども含め、インタビュー対象者の増加・更新等をしながら、引き続き活動を継続していきたい。

5. まとめ

本実践は、Target2025 のもとで入学した1年生を対象に、各学部別インタビューで得られた先輩学生の学習者ナラティブをもとに英語学習への取り組みを伝えることで、入学初期の段階で自らの英語学習を学士課程全体の中に位置づけて考える機会を提供することを目的としている。単なる動機づけにとどまらず、4年間（または6年間）を見通し、さらには卒業後の学びにも繋がる継続的な英語学習の姿勢を育む点において、Target2025 の理念と密接に関わる実践である。

本稿では、Target2025 における英語カリキュラムの概要を振り返り、学士課程全体を通じた英語学習を全学的に展開していく連携体制について紹介した。また、その一環として、学部別インタビューを通じて把握したロールモデルの取り組みや、英語授業オリエンテーションの実施の経緯について述べた。特に、オリエンテーション後に実施したアンケート結果について KH コーダーを用い分析した結果、オリエンテーションの実施

が、学生の学士課程全体を通じた英語学習の動機づけに有効であることが明らかになった。また、オリエンテーションでのペア・グループワークへの取り組みが、学生同士の人間関係構築をはじめ、授業への積極的な取り組みへと繋がることも期待できる。しかし一方で、カリキュラム改革後の新体制のもとで初めて実施された大規模なオリエンテーションであったため、詳細な情報が一部抜けていた等、関連情報が網羅的ではなかった部分もあった。また、オリエンテーションでタグを組む専任教員と非常勤講師との連携をより密に図る必要があるなど、課題点も残っている。以上の点を踏まえて継続的に改善を行い、次年度以降は本取り組みをさらに精緻化し、新入生支援の質向上に努めていきたい。

引用文献

- 岡山大学教育推進機構外国語教育部門 (2025). 『令和6年度活動報告』
- 岡山大学教学企画室 (2024). 「岡山大学における教育改革 (Target2025) パンフレット」の発行について <https://www.inec.okayama-u.ac.jp/hashtag/target2025/>
- 香取真理・角薫 (2018). 「ユーザの体験に関わるエピソードを効果的に引き出すインタビュー手法の調査」『じんもんこん 2018 論文集』 277-282.
- 末吉美喜 (2019). 『テキストマイニング入門 Excel と KH Coder でわかるデータ分析』 オーム社.
- 文部科学省 (2017). 新しい学習指導要領の考え方ー中央教育審議会における議論から改訂そして実施へー https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf
- 横江百合子・山内香代子 (2023). 「日本人大学生の英語力と英語学習へのモチベーションに関する研究」『東洋学園大学紀要』 第31巻、65-84.